

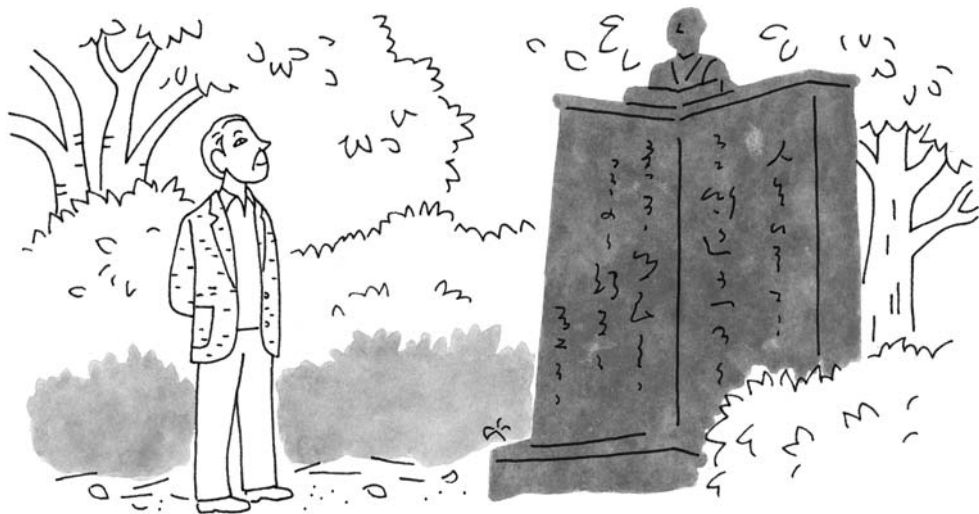


南部 陽一郎(なんぶ よういちろう)  
物理学者、豊中市名誉市民

1921年生まれ。東京帝国大学(現東京大学)理学部卒業。「対称性の自発的破れ」の概念を確立し、2008年10月、ノーベル物理学賞を受賞。シカゴ大学名誉教授、大阪市立大学特別名誉教授、大阪大学特別名誉教授。

私は東京で生まれ、福井で育ち、東京で学び、大阪で結婚、就職、アメリカに居住という長い生涯を送ってきた。しかし、20年ほど前から頻繁にシカゴと豊中の間を往復し、妻とともに市のご厄介になつてゐる。私のふるさとといえば福井だろうが、豊中は第二のふるさとだという気持ちがある。それで私と豊中との関係の始まりを思い出してみよう。

太平洋戦争のとき私は陸軍に招集されて技術将校となり、立川の電波兵器研究所に配置されていた。その後、東京の爆撃が始まったので、私の部門は宝塚の逆瀬川にあつたゴルフ・クラブと小林の聖心女学院の建物に疎開することになった。私の任務は大学や会社との連絡、レーダーの实地試験などであつた。しかし戦争の脅威は私を追いかけて、関西にもやってきた。何回もの爆撃で大阪は焼け野原になつた。そして昭和20年(1945)7月に阪神国際飛行場(現在の大阪国際空港)などを襲つた大空襲では、宝塚でも地響きがして、真黒な煙が上がるのが見えた。



間もなく戦争は終わつたけれど、私と関西との縁は切れず、結婚して豊中で暮らすことになった。寓居を構えたのは上野の地で、現在と同じ場所である。高台の端に位置しているので、熊野町方面のアパート群がよく見える。しかしそのころ、近くの上野小学校の辺りは松林、家の後ろは兎川まで畑地、その向こうは竹藪が続いていて、春先には土筆や蕨を摘むことができた。村道を辿つて八坂神社の辺りまで配給米を担いでゆき、精米してもらうのは私の役だった。

私はささやかな「一級河川」兎川に沿つて、上野坂辺りから夕日丘にかけてよく散歩する。でも、昔のおもかげを思わせるものはもうほとんど残っていない。多少の田んぼ、仏眼寺と墓地、そして石丸梧平顕彰碑と深田与平次記念碑が並び立つ茂みくらいだろうか。

その顕彰碑に刻まれている警句「人生に結論なし ただ創造の一寸あるのみ 意味は発見し得る者にのみ輝く」に、私は同感を覚える。

## 第二のふるさと

南部 陽一郎